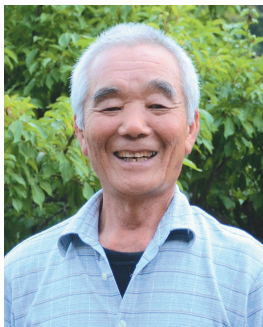


さつま × しごと

Vol.16



なかやま たかし

中山 敬志 さん (77)

柗野地区出身。農業を営みながら同地区のひがん花まつり実行委員長を歴任するなど地域を盛り上げることにも貢献。自身が受け継ぐつづら工芸は多くの人気を集め、今年5月に県指定伝統的工芸品に指定される。



つづら工芸 × 中山 敬志

▼のどかな田園風景が広がる柗野地区で、農業を行う傍らつづら工芸作りに取り組むのは中山敬志さん。工房にはこれまでに作られた作品がずらりと並びます。

▼つづら工芸は、野山に自生するツヅラフジのツルで様々なかごを編む同地区の伝統技法。使い込むほどに独特の色味が増し、素朴でありながら美しい外観と、10年以上使っても壊れない丈夫さを兼ね備えています。「同じ編み方でもツルの色や太さ、幅がそろっていないので出来栄が全然違う。作品それぞれに個性が生まれるから奥が深い」と中山さんはつづら工芸の魅力を語ります。

▼中山さんがつづら工芸を始めたのは定年を過ぎてから。宮之城伝統工芸センターのつづら工芸教室に通い始めたのがきっかけです。4年間通い基礎を学び、その後も腕を磨き続け、自分の作品を編み上げるようになりました。当時からつづら工芸の技法を受け継ぐ人は少なく、現在は中山さんが県内で唯一その技法を受け継いでいます。「つづら工芸を受け継ぐ人が少ないのは知っていたので、伝統ある技法を絶やしたくない」と思い入門しました」と当時の心境を語ります。

▼注文の多くは県外からと話す中山さんは「興味を持ってくれる人がいるのはありがたい。自分の作品を見た人がどう感じたか聞いてみたい」と笑顔を見せます。様々なデザイナーの注文を受け、持ち前の探求心で芸術的な作品を生み出します。他の作品を参考にすることもあり、旅行で訪れた民芸品店では、つい足を止めて見入ってしまうそうです。

▼中山さんの悩みはツヅラフジが手に入りづらくなっていること。「全ての注文には応えられないのが現状です。つづら工芸を教えてほしいという方もいますが、材料が少なくても教えたくても教えられない」と伝統を伝えていくことの難しさを話します。「続けることが大切。無くなってしまうと再び始めるのは難しい。伝統を守るために興味がある人には教えた」と困難な状況でも中山さんの強い気持ちは変わりません。



様々な編み方によって作品一つ一つに個性が生まれます。